「思い出の場所の再生」

株式会社　笠原建設　小野島　菊華

私は幼少期、建設業に対してあまりいいイメージは有りませんでした。理由は機械の騒音が不快だとか、働いている作業員の方が怖いということではなく、別の理由がありました。

私の生まれ育った地元は、近くにコンビニエンスストアーやゲームセンターといったお店はありません。ただ田んぼが一面に広がっているだけで、今思えば何もなかったと感じています。しかし当時は外遊びが好きだったので、友達や姉妹と公園でよく遊んでいました。学校が終わると日が暮れるまで外で遊び、家に帰って家族とご飯を食べる。それが私は一番幸せと感じていました。公園は私にとって大好きな遊ぶ場所であり、大切な思い出の場所でした。

ある日、いつものように姉と公園へ行くと風景がいつもと違うことに気づきました。遊具がなくなっていたのです。辺りを見渡しても、いつも遊んでいた遊具がありませんでした。その時、なぜ遊具がなくなってしまったのか理解できず、家に帰り祖父に訪ねました。「さっき公園に行ったら、遊具がなくなってた。なんで。」 祖父は、「あの遊具で小さい子が怪我をして、危ないから無くしたんだよ。」と言いました。今考えてみればこれ以上怪我をする子供が出ないようにする為だと理解できますが、当時の自分にとっては、皆の遊具を土木業者の人がとっていってしまったと思い深く傷つきました。

数年後、私は高校生になりました。ものをつくるのが好きだったので、工業高校に進学しました。入学当初はデザインについて学びたかったのですが、母と姉からの進めもあり、土木科へ入ることになりました。最初は、土木という言葉を聞いてもよく分からず、何を学べるのだろうと思いました。幼少期に遊具をとられてしまったという印象が強かったため、余計に不安になりましたが、測量実習で校外を測量したり、データを元に図面を描いたりするうちに、それまでは解体作業や撤去作業をするのが土木だと思っていたので、一から“もの”をつくり上げることができると知った時“わくわく”しました。自分が知らなかっただけで、ものづくりには様々な業種があり、それぞれ人の目に多く触れるものであること、多くの方に利用してもらえるものであることが共通していると思いました。

高校を卒業後、私は建設会社に就職し、今こうして『わくわく』しながら、現場管理の仕事が出来ているのは、母と姉の助言があったからだと思っています。この先、一人だけで現場を担当するようになった時のために今、周りの先輩から教えていただいていることをたくさん吸収し、自分の“力”にしたいと思います。今は、ただひたすら自分が進みたい道へ突き進めるよう、がんばるというのが私の目標です。多くの方に支えられ、助けられるだけではなく、今度は私が人の役に立ちたいです。そして、無くなってしまった地元の公園をいつか自分の手で復活させたいと思っています。